

終章 研究の総括

本研究の目的は、中等作文教育の活性化を目指して、「書くべき内容（想）」の発見と「書き方（形）」の習得とが一体化したインベンション指導の在り方を解明していくことにある。

この目的を達成するために、三つの研究課題に取り組んだ。

第一は、明治以降の作文教育において、インベンションの重要性がどのように自覚され、発展してきたかを歴史的に確かめることである。

第二は、先行実践例から得られる知見を整理することによって、「想の形成条件」を明確にすることである。

第三は、この知見を生かし、今日の国語科教育に生かせる具体的な作文指導法を提案していくことである。

I インベンション指導の自覚

1 明治期におけるインベンション指導

(1) 範文模倣期におけるインベンション

明治前・中期は、往来物や漢文学系統の教科書によって「範文模倣・実用文重視」の作文教育が展開された時期である。この期にあつては、「いかに書くか」だけが問題にされたから、インベンションが自覚されるはずもなかった。

それでも、書き手の思想を重視すべきだという主張が少しずつなされるようになっていた。例えば、作文教授の要は「思想を達者に又健全に書き表す」ことにあると指摘した理論書や、発想訓練の課題（「連環法」など）を収めた教科書も発行され始めていた。

修辞学においては、材料と構成の両面から「文章組立法」が説かれ、インベンションを重視したジェナングの修辞学理論も紹介された。ジェナングは、インベンションを「文章全体を統括し組織化していく根源的な力を持つもの」として捉え、インベンションを豊かにするために、「観察」「熟慮」「読書」によって自己修養することの必要性を説いていた。この考え方が、明治後期の修辞学研究に影響を与え、さらに大正期には「綴方・作文に於て創造を誘導する合法的な原則」であると位置づけられるに至ったのである。

(2) 自由発表作文期におけるインベンション

明治後期は、「自由発表作文」期である。自己の思想を自由に表すことが尊重され、「（作文の）予備段階での指導」の重要性が指摘されるようになった。なかでも、「場の条件」を明確にすることや、「観察力を鋭くし、思想を養うこと」が強調されるようになる。中学校用作文教科書においても、「構想」の重要性が説かれるようになった。

修辞学においては、学的体系化を志向した書物が相次いで出版された。インベンションの概念を「取材」「選材」「構成」をも含んだものとして捉え、その育成法についても具体的に論じた書物や、修辞過程を内容と外形の両面から捉え、「想」を「漠然として散漫に近き状態」から「特性ありて結体せる状態」へ進むものと定義した書物が登場した。

このように、明治期には、ドイツの教育学やアメリカの実用的修辞学の影響を受けて、自己の思想を養うことの重要性が自覚され、インベンション指導の萌芽が見られるようになったのである。

2 大正期・昭和前期におけるインベンション指導

大正期を迎えると、児童中心主義と呼ばれる教育思潮と、書き手の内面を尊重し自己表現を追求しようとする「生活綴方教育」の発展を受け、中等作文教育においても独創性を求めた先駆的实践が登場するようになる。飾り立てた文章を書くことよりも、書き手の「想」を重んじ、「内面的真実」を引き出すことを重視するようになったのである。

また、修辞学研究の側からも、五十嵐力や佐々政一らによって独自の教科書編集が進められ、「想」の形成には、「場の条件設定」、「観察の重視」、「内容の焦点化」、「観察点の決定」が欠かせないことが明らかにされていった。

(1) 五十嵐力のインベンション指導

五十嵐力は、「六何説」を唱え、文章を書く際には「何故に、何人が誰に対かひ、何時、何処にて、如何なる事を、如何様に言ふべきか」を常に考えよと提唱した。

五十嵐は、「生徒をして書きたいといふ気分にならせる事」を重視し、「一つの事物題目に関する沢山の睨みどころ」を示すことに力を注いだ。五十嵐は、「場」の条件を明確にするとともに、類題や実例や文話を豊かに提示することによって、「観察の重視」と「中心思想の発見」に気づかせ、発想力を高めようとしたのである。一方、構想については、「目分量式」に大体の見当をつけ、後は頭の動きや筆の運びに任せ、書き終えた後に磨きをかければよいと教えている。ここに「形想一如」の考え方が表れている。

さらに、添削指導においては、「思想の明写」と「言表の穏健」に重点を置くとともに、着眼点の良否について刺激的な評語を添えていった。添削と評語によって「想」を育て、これからも書き続けたいという気持ちを引き出そうとしたのである。

(2) 佐々政一のインベンション指導

佐々政一は、「作文教授法」を著すとともに、作文教科書『日本作文法』及び作文学習書『中学作文講話』を編纂した。彼の作文課題には、五つの特徴が見出される。①書翰文における「場の設定」、②記事文における「観察」と「選材」による「内容の焦点化」及び「配列法」との関連づけ、③叙事文における「主想の決定」と「観察点の明確化」及び「リライト作文」の導入、④説明文における「分析の観点提示」、⑤議論文における「命題の立て方」及び「証明の方法」の習得、である。

このように、佐々の考案した作文課題は、コンポジションとインベンションとを融合させた画期的なものであった。各文種の表現過程に沿って指導していく際に、学習者の「想」の形成を促す工夫を随所に織り込んだのである。

(3) 芦田恵之助のインベンション指導

芦田恵之助は、学習者の書く意欲を重視した「随意選題」の方式を説いて、初等作文教育に新生面を開き、中等作文教育にも大きな影響を与えた。芦田は、一人一人が書く内容を持てるようにすることを優先し、「綴らんとする心」を引き出す方法を具体化してみせた。

芦田の指導の特徴は、次の四点にまとめられる。①「場」の設定に配慮し、書くことに必要感を持たせるようにしたこと。②文話によって、テーマの選択や視点の設定を学ばせたこと。③個々に応じた文題や具体的ヒントを与えることによって、書きたいものをつかませたこと。④高学年に対しては、思想の配列など構想指導も含んだ指導を行ったこと。

こうした芦田の実践的提案は、高等女学校で活躍した金子彦二郎や、戦後の新制中学校で単元学習を展開した大村はまにも大きな影響を与えていった。

(4) 金子彦二郎のインベンション指導

中等作文教育においても、大正期から昭和前期にかけて、意欲的な実践が散見されるようになった。なかでも金子彦二郎は、「想」の発見に貢献する「暗示的指導」を多様に展開し、その成果を『現代女子作文』に結実させた。金子の発想の基点は、「何も書くことが無いといふ生徒も、実は書くべき材料を持合してないのではなくて、如何なる方面に着眼すべきかに思ひ当らない」でいるだけだという認識にある。金子は、文話や生徒作品やキーワードの提示によって、着想や取材（場面の切り取り方）、表現形式（別の視点からの観察）等の暗示を試み、独自の題材及び中心点を発見させるように導いたのである。

また、文体についても、物事を知的に説明する場合に対話体や自叙伝体で書くことも許容したりするなど、既成概念に囚われず、常に新しい試みをするように求めていた。題材には生徒の趣味性を満足させるものを選び、「お話の続きの創作」「絵画に表れてゐる情景の描写」「短い挿話の脚色」「遠足の童謡化」など新しい試みを企てたのである。

金子は「想」を引き出す指導法として、①「場」の設定の明確化、②「文題」による取材対象の焦点化、③「観察」の重視、④「立場」の明確化、⑤「目的」の明確化、⑥「文話」による着眼点の提示、⑦「仮構の物語」の創作、⑧「討論」による視野の拡大、⑨作文処理段階における「相互交流」、などを取り入れていったのである。

II インベンション指導の進展

1 昭和後期以降のインベンション指導理論史

(1) 社会的通じあいの重視

1947（昭和22）年に新制中学校・高等学校が発足してからは、自由に自分の言葉でわかりやすく表現することが謳われるようになった。また、「経験」を通して「社会的手段としての文章表現力」を身につけることが重視された。

初等作文教育では、「作文・生活綴り方教育論争」が起こり、「表現指導か生活指導か」という争点をめぐって活発な論議が展開された。また、この対立を超えるものとして、西尾実が「社会的通じあい」を基幹に据えた作文教育論を展開した。

(2) コンポジション理論の導入

戦後の中等作文教育に大きな変化が現れるのは、1960年前後である。森岡健二らによって紹介されたコンポジション理論が昭和33年度版学習指導要領に導入され、系統的・分析的な作文指導への関心が高まることとなる。主題の選択・決定、アウトライン、パラグラフなど、文章作成過程ごとの学習事項が明確化され、誰にでも取り組める指導法として、広く普及することとなったのである。しかも、この理論には、「正しい思考に基づいて、内容とことばを構成的に整え、創造的な思想を文章によって生産しよう」とする強い願いが込められていた。しかし、実際の教室においては、この方法を教条的に適用しようとしたために、かえって創造性が失われるという事態を招いてしまった。

(3) インベンションの再評価

1960年代後半になると、こうした傾向への反省としてニューレトリック運動が紹介されるようになる。ジェナングの修辞学理論が再評価されたのもこの頃である。なかでも、波多野完治は、アイデアの素になるものを「体験」「伝達」「思考」の三点に整理すると同時に、「想」を言葉として定着させるために「型」を用いる必要があると説いた。

また、倉澤栄吉は、コミュニケーションとしての作文を重視し、「場の設定」と「目的意識・

相手意識の明確化」が「想」を形成していく要因となるととらえた。倉澤はさらに、「想」の展開過程に沿った作文指導法を説明すべきだと主張した。

田近洵一は、発想を規定し触発する条件を、①材料、②立場・態度・観点、③相手や場との関係、④目的・意図・モチーフ、⑤文種・形態、の五点に整理し、「想」の形成を図るには、①題材面への認識の深化、②相手意識・目的意識に基づく表現主体としての立場の確立、③表現形態面への十分なる理解、の三条件を満たすことが必要だと指摘した。

(4) 創造力育成技術化の試み

1960年代後半には、国語科教育以外の分野でも発想力を育てる方法が盛んに提案された。川喜田二郎は、カードや意味マップを活用する「KJ法」を考案し、樺島忠夫は、文章工学に力を注ぐとともに「変形思考法」による発想の技術化に努めた。これらは、「想」を視覚化し、操作しやすい状態に置き換えたという点において意義を持つものであった。

こうした提案を受けて、連想語彙によって主題を発見する実験的授業も試みられ、一定の成果を得たが、「想」がいたずらに拡散してしまうという問題点も浮き彫りになった。

(5) 文学的文章表現活動の再評価

一方、この時期には、文学的文章によって自分の内面の課題を表現することの意義や、事実の背後にある本質を形象化することの重要性も指摘された。

林四郎は、文学的文章を書く際の手順を明確にし、描写の練習から創作に至るまで、常に発想のタネになるものを提示した。なかでも、多用しているのが「古典の書き換え」である。「想」を具体化する際の「媒介となる形式」として古典を活用したのである。

西郷竹彦は、見たままを書くだけでなく、事物をその関係及び自己との緊張関係において捉えることの重要性を説くとともに、対象を個別的に捉えることとそこに普遍的本質を捉えることとを「形象」において統合すべきだ、と主張した。

また、この時期に急速に広まった理論に、ソシュールの言語学がある。能記と所記との関係は恣意的なものであると捉えるソシュールの考え方は、記号論に大きな影響を与え、構造主義の礎となった。これは、作文教育においても発想の転換をもたらすものであった。モノと切り離してコトバだけでやりとりできるという認識は、「想」の発見の可能性を広げ、高等学校作文教育においては、『新作文宣言』へとつながっていった。

(6) リライト作文の再評価

1980年代になると、表現と理解の関連指導が重視されるようになり、「リライト」が「想」の形成を促す指導法として再評価されるようになった。これは、範文の「型」を利用しながら、視点人物を変えたり、文体を改めたりすることによって、新たな「想」を引き出そうとする指導法である。かつては、単なる模倣であるとして否定されていたが、「書き換え」の過程で認識力が鍛えられる創造的活動であると評価されるようになったのである。

初等教育では、青木幹勇が、主人公になりきって書く「変身作文」や、物語を俳句に書き換える学習などを試みた。1990年代に入ってから、首藤久義が、リライトを「翻作」と呼び、創作につながる創造的な学習として位置づけた。近年では、井上一郎、府川源一郎・高木まさきらが、「書き換え」学習を認識力や創造力を育成する指導法として位置づけ、積極的に推進しようとしている。

(7) インベンション指導の理論的研究

1970年代後半から、大西道雄はインベンション指導の本格的研究を進めてきた。大西は、短

作文の創構機能に着目した後、意見文におけるキーワードの創構機能について考究を進め、1997年に至って『作文教育における創構指導の研究』をまとめ上げた。

大西の研究において、特に注目すべきは、①意見の生成過程を〈漠想〉→〈分化想〉〈統合想〉と分節化してとらえ、指導の手だてを明確にしたこと、②「状況的な場」を設定し、書く立場を明確にさせることの必要性を解明したこと、③アイデアを作り上げるための主題キーワードの働きを解明したこと、④発想を広げたり、意見を展開させたりする論理キーワードの機能を解明したこと、にある。この研究は、文献調査に基づく理論構築にとどまらず、授業仮説を立て、臨床的・実践的に研究を進めていった点に大きな特徴がある。これによって、「創構を軸とする生成的作文教育」の道が開かれていったのである。

2 昭和後期以降の先行実践史に学ぶ知見

戦後の中等作文教育実践史は、生活文、論理的文章、文学的文章、リライト作文の四種を軸に整理するのが実際的である。認識力と文章表現力の両面から指導内容を分析していくことによって、各実践におけるインベンション指導の知見が明らかとなるからである。

(1) 生活文・実用文におけるインベンション指導

生活文・実用文の作文指導においては、「細かく深く見つめ、つきつめて考え、描写することによって、問題の本質にまで目を向けさせること」や、「読者にわかるように具体的事実に即して述べるように指導すること」の重要性が明らかにされてきた。その際、常に目的意識と相手意識を持たせるとともに、対象の切り取り方について考えさせることによって、「想」の形成を促進していくことができるのである。

(2) 論理的文章におけるインベンション指導

論理的文章表現の指導については、資料提供による問題意識喚起、問題点の発見と吟味、根拠となる事例の収集と選択、反対意見・対立意見の想起、立場の明確化、立場の転換による発想の拡充・深化、題目の検討による主題の明確化、が指摘されてきた。また、「分析的発想」と「比喩的発想」によってキーワードを発見し、そのキーワードとサブ・キーワードの取り合わせによって新しい発想を導き出すことも試みられている。

論理的文章表現の場合、明確な意見と具体的な根拠を持つことが肝要である。そのためにも、ものごとを多様な角度から分析する練習や、立場を明確にして述べる練習を積み重ねることが求められているのである。

(3) 文学的文章におけるインベンション指導

文学的文章表現においては、「人称の変更」や「視点人物の転換」を用いることによって、自己の発見や自己認識の深化を導くことができるという点が明確になってきた。思春期にある生徒達にとって、自己を客観的に見つめ、偽りなく他者に語るということはきわめて困難な作業であるが、虚構の作文ならば、個人的なことであっても他者の出来事として書くことができ、心の内にあるものが語りやすくなるのである。また、他者の視点から自分を見つめ直すことが、他者の理解を深めることにもつながるのである。

(4) リライトによるインベンション指導

「作文嫌い」の生徒達が表現活動に取り組むように導くには、書くことに対する抵抗感を軽減しなければならない。また、文章表現の質の向上を図るには、読書体験を増やす必要がある。この二つの問題を解決するのが「読み書き関連指導」である。

中学校では、①パロディ作り、②漫画や絵の活用、③ブレインストーミングの活用、④古典

作品の活用など、多彩な方法が用いられてきた。高等学校では、「枠組み作文」が活用されてきた。範文のキーフレーズを援用して、新しいものの見方・考え方を育てる方法が取り入れられるようになったのである。

3 大村はまのインベンション指導

こうした文種ごとの実践的知見を総合的に提示してくれているのが、大村はまである。大村の指導の特徴は、次の五項目に整理することができる。

(1) 生き方の探究を見据えた学習課題（テーマ）の設定

大村は、作文教育の最終目標を「自己を見つめ、自己を育てる」ことに置いていた。特に「個人文集」では成長過程を軸として多面的な角度から自己を見つめさせ、卒業間近になれば「人以上の力を持つもの」についても考えさせようとした。このように高次の目標を掲げ、価値ある課題を設定することが、発想指導に重要な意味を持つのである。

(2) 文章表現力の分析を踏まえた学習課題（作文技術）の設定

大村は、「段落の切り方」「主題の出し方」「中心文の位置」「結びの書き方」「文と文の書き継ぎ方」など、構成や記述に関する諸能力を取り出し、各事項に対応する学習課題を考案した。その典型として「常套句の禁止」を挙げることができる。書き出しや結びに常套句を使用させないことによって、表現を洗練させ「想」を明確化させていったのである。

(3) 二種類の「場の設定」

「場の設定」に関しては、作文課題の「場の設定」と学習者相互の「場の設定」との二つの位相で捉えることができる。前者は、書く目的や相手を明確にすることによって、話題の焦点化を促すものである。後者は、生徒相互の交流を盛んに行うことによって、相手意識を高め、書くことに対する心理的負担を軽減するものである。いずれの場合も、「学習の手引き」が果たした役割が大きい。

(4) 日常的取材活動の重視と読書による取材内容の充実

大村は、「書きたいこと」を常に持っている状態に育てることが基本であると考え、「題材集めの用紙」を活用して、日常的な題材集めを継続するように指導した。さらに、読書指導にも力を入れ、読書と作文を有機的に関連づけた指導を展開した。読書への意欲や読書による感想を記録することが、「書くべき内容」の発見につながると考えていたのである。

(5) 「呼び水」キーワードによる発想・着想・構想の支援

大村の「学習の手引き」に見られる「書き出し文例や書き継ぎ文例」、「題材案やとらえ方のヒント」、「問いかけ型の文題」は、発想の「呼び水」としての機能を果たすものであった。大村は、生徒個々の目の位置に自分の目を置いて「題材」を発見し、「書き出し」や「書きさし」の言葉を提示することによって、生徒の発想を導き出したのである。

Ⅲ インベンション指導の実践的提案

1 作文授業づくりと「想」の形成条件

作文の授業づくりを進めるには、①作文課題の設定、②意見の拡充、③表現スタイルの選択、④評価と処理、の各段階において、「想」の形成・拡充を図る必要がある。

そこで本論文では、「想」の形成条件を、A「題材に対する認識の深化」、B「書き手の立場の確立」、C「表現様式の理解」、D「状況的な場の自覚」の四つに整理し、(1)虚構の文章表現、(2)論理的な文章表現、(3)リライト作文の三形態について、この条件を満たす授業研究

に取り組んだ。

2 虚構の場を生かした発想・構想指導

(1) 手紙文における虚構の場の活用

芥川龍之介の恋文にお断りの返事を書いたり、戦没学徒に日本の現状を伝えたりする手紙文の学習である。いずれも架空の設定ではあるが、相手と目的が明確なので、書く内容を見つけやすく、集中した学習を展開することができる。実用的文章の学習も、虚構の場を活用することによって、表現意欲をかきたて、自己内対話を導くことができるのである。

(2) 絵本を発想の契機とした物語文の創作

シルヴァスタイン『ぼくを探しに』を発想の契機として、「自分探し」の物語を創作する学習である。原作の「足りないかけら」を探すというモチーフが生徒の心に訴えかけ、自分のあり方や生き方を見つめ直すことにつながったのである。また、「三人称で語る」という表現形態を取り入れたことによって真情が語りやすくなるとともに、事件のきっかけや心理を描写するように導く「書き出しモデル」によって、主題が明確化したのである。

(3) 絵本に取材した報道文の創作

木村裕一『あらしのよるに』において語られた事件、もしくは翌朝に起こるはずの事件を報道文に書き換える学習である。この課題設定ならば、①読者に読んでもらえる表現を志すようになる。②5W1Hによって取材内容を点検する力を育てることになる。③「見出し」「リード」「本文」と書き分けることによって、要約力と詳述力が養われる。④重点先行型の文章構成法を身につけることができるのである。

(4) 詩や古典文学を活用した創作活動

唐詩を口語定型詩にリライトしたり、現代詩の発想を借りて詩を創作したり、古典文学の視点人物を転じて別の物語に書き換えたりする学習である。ここでは、「表現様式の理解」と「立場の確立」が「想」の形成を促す。いずれも、原作の展開の仕方に依拠する学習だから負担も軽い。材料選択や用語選択だけに心を砕けばよいということになる。短時間で仕上がり、書き上げた作品の質も高いので、生徒一人一人が満足感を得やすい学習である。

3 論理的文章表現における発想・構想指導

(1) 連想語彙と変形思考法—「フリーター論」の場合

連想語彙と変形思考法によって、題材を新しい角度からとらえ、題材に対する認識を深めさせる実践である。まず、「フリーター」から連想される語彙を組み合わせ、キーフレーズを作るところから、「想」の形成を促す。次に、「フリーターは是か非か」と二者択一を迫ることで立場の明確化を図っていく。さらに、「実態調査資料の読み取り」と「親の意見の聞き取り」という情報収集活動を取り入れるとともに、「各自の主題文案一覧」や「親の意見一覧」を提示して相互の意見の交流を図り、意見と根拠を明確化させていくのである。

(2) 教材と意見一覧による内的葛藤の誘発—「友情論」の場合

友情の在り方について挑発的に論じたエッセイを教材にして、内的葛藤を誘発し、意見の形成を促す実践である。「一定の距離を保つことが美しい友情を保つための条件である」という結論への賛否を「座席表形式の意見一覧」に示し、話し合いの場を設ける。さらに、意見と事実（根拠）を色分けしたカードや、文章構成モデルを明示した「学習の手引き」を活用することによって、構想力を高めていくのである。

(3) 内的葛藤を誘発する教材の開発—「やさしさとは何か」の場合

猛獣が生きた小動物を食べるという自然界の摂理を、子どもにそのまま伝えることの是非について、正反対の事例を対比して示すことによって「想」の形成を促す実践である。また、「事例の比較→対立点の発見→問題設定」という論の流れを図式化したワークシートを用意することによって、構想力を育てることをもねらった実践である。この実践においても、自分の立場と根拠の明確化を図るとともに、文章全体を見通せる手引きを用意することによって、作文の苦手な生徒も論理的な文章が書けるようになることが実証された。

(4) 対立意見を想定する—「ネコの安楽死は是か非か」の場合

ペットの飼い方について意見文を書く際に、対立意見の立場になって反論してみるという学習過程を取り入れることによって、「想」を拡充させた事例である。ビザが切れて帰国せねばならない外国人労働者が飼いネコを安楽死させた事件を話題にして、そのけじめのつけ方について賛否を問う。さらに、第二次作文として、対立意見の立場から書かせることによって、感性的・感情的反応レベルにとどまりがちな第一次作文を、論理的・理性的・多角的なものに高めていくのである。

4 取材力・構想力・展開力を育てるリライト作文

(1) 範文の応用による発想・構想の指導

寺田寅彦「柿の種」のレトリックを利用して、常識的な発想を転換させる指導事例である。「〇〇という所は存外△△な所だ」というキーセンテンスを利用して、別の主題と材料とを探させるのである。「存外」という副詞を使うことによって、日常性の意外な一面を探す発想力が鍛えられる。さらに、豊かな語彙力や論理的な思考力も養われるのである。

(2) 範文の応用による新題材の発見

伊丹十三「目玉焼の正しい食べ方」のレトリックを利用して、エッセイを書く学習である。①着眼点の鋭さと新鮮さ、②文章構成の確かさ、③事例の豊かさ、④語彙の豊かさ、⑤文末表現の多様さ、⑥センテンスの長短、⑦無駄な接続語句の省略など、範文の持つ長所を生かすために、各段落の最初の一文を「枠組み」として指定する。この「枠組み」を使うことで、「題材発見の目」が育てられるとともに、「主題提示—事例提示と理由説明—主題の再確認—新たな提案」という構成法を身につけることができるのである。

(3) 範文の応用による文章展開力の指導

別役実「正しい風邪のひき方」のレトリックを利用して、人間の心理を論じる文章を書く学習である。範文のタイトルがもつ着想の新しさと、四通りの対策の是非を判定していく論の展開を生かすために、ここでは、各段落の文末表現を「枠組み」として指定する。この「枠組み」を使うことで、①人間心理に関心を持たせ、自己を相対化して捉えるように導くことができる、②分析と比較の思考を活性化できる、③文章体の語句に親しませることができる、④書き出しや結びの表現が向上する、⑤首尾一貫した文章が書きやすくなる、という成果が得られた。

(4) 聞き書きによる取材力・文章展開力の育成

だが、「枠組み作文」も度重なればマンネリ化する。また、単なる言葉遊びとなる恐れもある。その弊害を克服し、鋭い人間観察や深い人間理解に導くことができるのが「聞き書き」である。異世代の方にインタビューした内容を、再構成し文章化することによって、取材力と文章展開力の育成を図るのである。その際、抽象的な人生論を漫然と聞くのではなく、「なぜ」「何を」「どのように」とディテールを聞くことによって、書くべき内容はいつそう深まっていく。また、取材時も記述時も、「現在→過去→未来」の順序を意識させることによって、「現

在」を共有した上で、「過去」に戻って原因・理由を探り、「未来」に向けて問題解決・発展の道を開いていくという論理的な筋道ができあがるのである。

IV インベンションを育てる指導法—提案のまとめ

以上の考察を整理し、インベンション指導の原理とその具体的方法を提案する。

1 「想」の形成条件

A 「題材に対する認識」を深める

①「見ること」の重要性を体験させること、②着眼点の例を示すこと、③数多くの題目案を示すこと、④内的葛藤を導く課題文を提示すること、⑤課題内容を分析させること、⑥対立意見を想定させたり主題文を書かせたりすること、などが挙げられる。

B 「書き手の立場」を確立する

①他者の目から自分を捉え直してみること、②反対意見や対立意見の立場になって考えてみることを、などが挙げられる。

C 「表現様式」を理解させる

①同題材を別の文種で書き換えてみることを、②「続き物語」を創作すること、③「構想メモ」を活用すること、などが挙げられる。

D 「状況的な場」を自覚させる

①賛否いずれかの立場に立たせること、②根拠となる事例を自らの体験や知識から想起させること、③自分ならばどうするかと問い続けること、などが挙げられる。

こうした条件に配慮しながら、作文授業づくりを進めるのである。

2 「書く場」の設定

作文授業づくりの第一の問題は、「書く場」の設定を明確にすることである。この「場」の設定については、学習環境と表現内容の二つの位相で捉える必要がある。

(1) 「共感的人間関係」に支えられた学びの場を作る

これがなければ、国語の学習そのものが成立しない。各自の表現を尊重しあう人間関係や、「読み手」がいるという安心感を育てることが、作文教育の大前提となる。

(2) 表現内容や方法に関する「場」の設定—三つの観点

①「立場の鮮明化」を求める「状況的な場」を設定すること。相手意識、目的意識、主題意識、方法意識を明確にできるように具体的な場面の設定を行うのである。しかもそれは、自らの立場の選択が迫られるような切実感のある「場」でなければならない。

②「情報格差」が自覚できる「場」を設定すること。それぞれの生徒に、「固有の情報」を持たせたり、「自他の違い」に気づかせたりして、表現意欲を喚起するのである。

③「表現様式」を工夫すること。いつも同じ文体で書くのではなく、表現形式に変化を持たせるのである。同じテーマでも、文体によって異なった表現を導き出せるという実感が、表現意欲を喚起していくのである。

3 「作文課題（テーマ）」の設定

作文授業づくりの第二の問題は、「どのような作文課題を与えるか」ということである。これは、テーマ、提示方法、教材開発の三つの面から考える必要がある。

(1) 「テーマ」

①自己・心、②家族・友人、③地域・社会、④学校・教育、⑤人生・仕事、⑥福祉・健康・

生命、⑦政治・経済、⑧国際・文化、⑨言語・情報、⑩自然・環境、⑪夢・空想、などの幅広い分野から、関心度、身近感、新鮮味、学習価値を選択基準として、常に新しいテーマを探し続ける必要がある。

(2) 「提示方法」

「〇〇について述べよ」という提示の仕方は、「想」の形成を促しにくい。問いかけ型の文題、問題の焦点化を促す文題、視点の転換を求める文題、が効果的である。

(3) 「教材開発」

文学的文章表現の場合は、発想の手がかりとなる絵本や物語を活用したい。その際、哲学的内容を持つものや、多様な読みを許容するものが望ましい。論理的文章表現の場合は、内的葛藤を誘発するような文章や、事例を対比的に紹介している資料が求められる。

4 「書くべき内容」の発見・拡充への支援

作文授業づくりの第三の問題は、「書くべき内容」の発見・拡充への支援である。インベンション指導の最も中心的な課題である。「書くことがない」という生徒の多くは、着眼点の発見に苦しんでいることが多い。その具体的解決策として、四種類の方法を提案する。

(1) 「教師の暗示的示唆」

記述前に、具体的事例を示すことによって、そこから連想を広げ、着眼点を発見するように導くのである。例えば、①テーマに関するエピソードを文話として語る。②「題目案」や「類題案」を提示して多様な切り口を示唆する。③同輩あるいは先輩の「作文モデル」を紹介する。④「書き出し例」を提示して応用させる。⑤「書きさし文」や「書き継ぎ文」を提示して続きを書かせる、など。

(2) 「思考類型の活用」

思考パターンを援用することによって、対象への認識を深めていくのである。例えば、①「分析的発想」を用いて対象を分類・分析する。②「比喩的発想」を用いて対象を他の何かに喩えてみる。③「対立する事例や概念」の共通点・相違点について考えてみる。④帰納法・演繹法によって概念の抽象化と具体化を試みる、など。

(3) 「視点の設定」

視点の転換によって新たな発見を導き、書くべきことを焦点化させるのである。例えば、①他者の「視点」から自分を捉え直してみる。②「擬人物語」のように、動植物や無生物の立場から考えを述べてみる。③「反対意見の立場」から書いてみる。④「もし〇〇だったら」と仮想の視点を設けてみる、など。

(4) 「キーワードの活用」

単語の組み合わせの中から、新たな発想を導こうとする方法である。①ブレインストーミングによって連想語彙を書き出すこと。②「マインド・マップ」を活用すること、など。

5 「文章全体を見通す力」(構想力)の体得

作文授業づくりの第四の問題は、「文章全体を見通す力」の体得である。「表現様式を理解」に関わる学習である。典型的な文章構成法を身につけることによって、文章全体を見通せる力を養い、発想力の向上も図るのである。

発想力と構想力を同時に育てる方法として効果的なのが、「枠組み作文」である。範文の「枠組み」となっている表現を活用して、新しい文章に「リライト」していくのである。

「枠組み表現」の抽出方法は、三類型に整理できる。①「書き出し型」、②「副用語型」、

③「述語型」である。①は、書き出しを指定することによって、主題の明確化を導く方法である。②は、「例えば」「存外」「むしろ」「確かに」「もちろん」「なぜなら」などの副詞や接続語を指定することによって、複眼的にものごとをに捉えるように導く方法である。③は、文末表現を指定することによって、事実と意見を書き分けたり、複数のものを比較考察したりするように導く方法である。こうした「枠組み作文」の学習を重ね、やがては自力で「アウトライン」が設定できるようになることを目指すのである。

6 「評価・処理」の改善

作文授業づくりの第五の問題は、「評価・処理」の改善である。インベンションは、記述前の発想・着想指導だけでなく、評価・処理段階においても考慮されなければならない。

生徒の表現意図を理解し、評語との齟齬を防止するとともに、次回以降の表現活動に生かせる指導法を考案するのである。例えば、①「作品に添える先生への手紙」という形で自己評価した文章を書かせる、②「相互評価・相互批評」によって同級生の発想・着想を学びあう、③過剰な添削を行わず、要所を押さえ、少しだけ直す、④「『私の本』づくり」によって成就感を持たせる、⑤「アンソロジー集」の作成に向けて作品を推敲する機会を設ける、などが挙げられる。

7 「カリキュラム」の改善

作文授業づくりの第六の問題は、「カリキュラム」の改善である。インベンション指導は、個々の内発的活動と外発的学習刺激とが適合しなければ意味をなさないから、カリキュラムについても、学級の実態に即して変更・差替のしやすい形で作成する必要がある。

具体的には、年間を通しての大きな目標を立てておき、各項目については「前・中・後期」に分ける程度の緩やかなものとするのが適当である。実践時期の区分基準は、①「生活文・手紙文→文学的文章→論理的文章」（描写から説明へ。説明から議論へ。）という流れ、②「身近な問題からグローバルな問題へ」あるいは「具体的問題から抽象的問題へ」という流れ、③「単純な条件設定から複雑な条件設定へ」という流れをベースとした。

本論文では、この基準に則った年間指導計画（26単元）の学習内容と指導方法を一覧表として示した上に、先に挙げた11分野（①自己・心、②家族・友人、③地域・社会、④学校・教育、⑤人生・仕事、⑥福祉・健康・生命、⑦政治・経済、⑧国際・文化、⑨言語・情報、⑩自然・環境、⑪夢・空想）について、差し替え可能なテーマ例70題を提示した。こうした多様なテーマと多彩な課題形式とを組み合わせ、さらに表現形態（文種）に工夫を凝らすことによって、生徒の「想」の形成に生きる作文指導を展開することが可能になっていくのである。

V インベンション指導がもたらすもの

インベンション指導を充実させることによって、何が変わるか。

第一に、生徒の表現意欲を喚起することができるということである。もとより、どの生徒も書きたいことがないわけではない。しかし、焦点の絞り方や書き方がわからないから書かないのである。また、自分の考えに価値を見出せないから書けないのである。インベンション指導は、その障壁を取り除いていく指導である。「自分の考えの固有性」を実感し、「表現方法」を獲得することができれば、どの生徒も堰を切ったように書き出すものである。こうして生まれてくる文章は、生気に満ちあふれたものとなる。

第二に、独創的な発想を導き出し、思考力や認識力を高めることができるということである。

インベンション指導は、新しい発想を求め、多様な視点から物事を捉えるように求める指導である。また、漠然としたものを明確な形に変えていく指導である。その積み重ねによって、対象をよく観察・分析する力が付き、思考力や認識力が高まり、独創的な考えも生まれてくるのである。

第三に、コミュニケーション力を向上させることができるということである。常に相手意識を明確にして書く習慣がつくとともに、お互いの考えを知りあい尊重しあうことで、学級内の自己存在感が高まり、学級全体の学ぶ姿勢も醸成されてくるのである。

このようにインベンションを重視した生成的な文章表現指導を展開するということは、つまり、生徒一人一人を「主体的表現者」として尊重し、他者とともに生きていく「社会人」を育てていくことに他ならない。自己を表現することのできた喜びが、他者を尊重することにもつながり、「書くこと」を通して社会的自己実現が達成されていくのである。